



平成23年度第 3 回 講演要旨

『鎌倉を護る龍神と高僧たち』

—— 古都保存法と文化財保護法 ——

講師：伊藤正義さん（鶴見大学文学部文化財学科教授）

とき：平成23年10月15日（土） ところ：鎌倉芸術館

◎山の意味

鎌倉世界遺産の国際会議で、「遺跡だけではなく背後の山に大変な意味がある」とイコモスの専門家が提言した。なぜ西欧の人たちは山にこだわるのだろうか。イギリスはナショナルトラストの発祥の地である。西欧の人たちにとっては、遺跡が単独であるというのではなく、周りの農地とか山の中に文化財が点在しているというイメージの方が、強いのだろう。私は「鎌倉を護る周辺の山稜部は、鎌倉の人たちの龍神の龍体とみなしていた宗教的な結界で大変意味がある」と理解している。鎌倉の山稜部は、13世紀の後半から蒙古襲来に備え、鎌倉を護るための宗教的な結界と考えられていた。



朝夷奈切通

◎文化財と保護法

文化財が、それを護るために必要な自然的環境の中にある場合は、古都保存法で保護できる。文化財保護法とは別の価値付けである。世界遺産のコア部分は饅頭のあんこにあたる。バッファゾーンは皮の部分である。違う法律の体系を組み合わせ使って世界遺産に申請するのは、鎌倉で初めて使われた技術である。鎌倉の饅頭の中身は、文化財保護法と古都保存法がブレンドされたあんこだと考えればよい。粒あんと練りあんが混ざっているくらいのイメージである。他の省庁の法律と文化庁の法律をジョイントして使っていないと、これからは世界遺産のハードルがどんどん高くなっていくので、日本では対応していけなくなるだろう。

◎鎌倉城論争

頼朝は寿永二年（1183）、「寿永の十月宣旨」で後白河院から東国の支配権を認められるまでは、建前上は謀反人のままだった。その拠点であるから「鎌倉城」

と呼んだのであって、建物の「城」ではない。鎌倉幕府は国内では唯一ダントツにそびえ立っている軍事力である。国外にしか敵が想定できない。時宗たちが仮想敵国として考えていたのは、モンゴル以外はあり得ない。

◎海と源氏

東国の源氏の軍事力の中心が陸軍と馬であって、西国の平家が船と海の武士団だとするとイメージしやすいが、頼朝が組織した南関東の武士たちはほとんどが、海に関係する武士が多かった。由比ヶ浜に海の信仰と結びつく若宮を置いて、その観音様も習合していたというのは、あまり目立たないが、海との関係が非常に深かったことを示す源氏のもう一つの事例である。

◎地震と龍体

鎌倉時代も非常に大きな地震があった。壊滅的な被害を受けた地震に対する恐怖が、日本の国土をどう護るかという、宗教者たちの考えにつながった。龍神が日本を護っているというモデルがあったと思う。

◎市民が守る龍神

鎌倉の場合は、ほとんどのお寺にどんどん都市化が押し寄せてきて住宅と接している。そのためには、これから都市と共存・共生していく世界遺産というスタイルを鎌倉が切り開いていかないといけないということになる。住民とちゃんと景観についての話し合いをして、合意を作りながら、都市と共存していく世界遺産というスタイルを作り出していくのだ、という以外に説明のしようがない。蒙古襲来の恐怖から、龍神が鎌倉を護ってくれた。ところが今度は、市民がその龍神を護る側に変わらなければならない。

◎市民トラスト運動

行政に働きかけてやってもらう市民運動とは別ルートで、私は今、行政に頼らない市民運動、行政を動かそうとする市民運動にかかわっている。市民トラスト運動がいずれ、この日本のトラスト運動発祥の地の鎌倉から、もう一皮むけて変身して、再出発できたら素晴らしいことだと思う。